

首里城跡出土ウィローパターン陶片に関する考察

——出土資料と伝世品の比較を中心として——

磯部直希

はじめに

沖縄県那覇市に所在する首里城にはおよそ500年にわたり琉球王国の王府が置かれてきた。王国の消滅以後も城は1945年の沖縄戦まで存在したが、戦後は琉球大学のキャンパスに転用され守礼門や歓會門などわずかな建造物が復元されるに止まってきた。復帰20年に当たる1992年に国営の首里城公園が開設され、首里城正殿の復元を皮切りに城郭全域に及ぶ復元事業が始まった。1994（平成6）年から4カ年をかけて実施された首里城内「京の内」の発掘によって、14-15世紀に遡る東アジア各地の陶磁器群が出土した。なかでも紅釉水注は北京故宫博物院の2点と景德鎮出土の1点に並ぶ類稀な出土例であり、これらの出土陶磁器518点は「中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料」¹⁾として、2000（平成12）年に重要文化財指定を受けたことでも著名である。一連の復元事業と発掘調査は、王国と首里城の最盛期を古琉球に見出す成果を挙げてきたとも言えよう。これに対して本論は、復元事業に先立って1984（昭和59）年に歓會門、久慶門の内側区画において行われた発掘調査で発見された、19世紀の遺物であるウィローパターンの陶片に着目する。王国末期から琉球処分にかけての時期に欧州から舶載された遺物と推定される同資料は、その後の城内の発掘で得られた歴史の古い、いわゆる優品の影に隠れ、発掘から30年余ほとんど顧みられることがなく、学問的検討の対象ともなって来なかった。この陶片は、同区域の発掘報告書の中で、57点の雑多な出土遺物とともに、一括して琉球王国解体以後に首里城に持ち込まれた陶磁器と判断され、管見では今までこの推定に疑義が呈されたことは一度もない。

ウィローパターンとは18世紀末のイギリスにおいて、創出された陶磁器の絵柄である。17、18世紀を通じて中国、景德鎮からヨーロッパに輸出された染付磁器に類出する楼閣山水の絵付を、イギリスにおいて銅版転写染付のパターンに転用し、量産化を図ったものである。銅版転写染付によるウィローパターンの生産は、イギリスからオランダに伝わり、英、蘭で生産されたさまざまな銅版転写染付の製品とともに、江戸時代後期から幕末にかけての日本にも盛んに輸出された。これらのウィローパターン製品は新奇な舶来品を愛でるオランダ趣味や煎茶の流行とともに、珍重され、愛蔵されてきたことから、オランダ本国よりも、むしろ日本国内に多くの伝世、出土事例があるとされる。19世紀のウィローパターンをめぐるこのような日英、日蘭の交流史的問題に関して、岡泰正、東田雅博らによる研究の基礎付けが行われ、伝世品の収集や考古資料の検討が積み重ねられてきた。本論は、陶片の図柄と高台内のマークなどから得られる情報を先行研究に照らしつつ、他の伝世、出土資料と比較し、同出土資料が首里城に搬入された上限を琉球王国末期にとり、下限を沖縄戦までとする、より広い時間幅を提示する。

この陶片の搬入時期を琉球王国末期と考えた場合、幕末の日本における日蘭交易の余波が、わずかな陶片といえども首里城にまで到達していた可能性を示すものである。また、従来述べられてきた琉球処分に関係する搬入品とする場合でも、その説が論拠に乏しく、下限がどの時期になるかが確定し難いことを考証する。本論の一連の検討は、19世紀後期の日欧交流史における琉球王国の存在に関して、陶磁器の交易や工芸史的な領域から再評価を行う試みでもある²⁾。

1. 首里城跡における近代の磁器

(1) 当該陶片を含む遺物の検出

1984(昭和59)年、沖縄県那覇市に所在する首里城跡では戦災によって破壊された城郭の復元に先立って発掘事業が実施された。この年度の発掘では城跡の外郭一帯のうち、第二尚氏四代尚清王代に築造された歓會門、久慶門内側地域の発掘が行われた。首里城は沖縄戦によって破壊された後、アメリカ占領期に琉球大学のキャンパスが置かれた。そのため城跡は大規模な整地を受け、当該発掘地域は厚い部分で2、3mに及ぶ盛土整地層に覆われていた。発掘はこの盛土を剥がし、地下に埋もれていた城跡の石畳など、かつての地表面の遺構を確認する方向で進められた。また盛土は多種多様な遺物を包含しており、それらの遺物を収集し整理する作業も実施された³⁾。

この盛土整地層から検出された陶磁器群のうち、57点が「近代の磁器」として発掘報告書に記載されている。本論が脚光を当てるウィローパターン陶片もこの枠の中で整理をされている。発掘報告書の解説ではこれらの陶磁器群について「明治印判染付の類で、首里城に熊本鎮台が置かれて以後首里城内で使用された汁器類であろう。」と述べている。発掘報告書の第41図以下32点の磁器類は手描きの染付磁器碗であり、いわゆる印判染付はその他の22点、他3点のうち2点は珉平焼の楕円皿と琉球赤絵の仏具の花生である。そして残る1点、第44図-7として掲載されている出土遺物がウィローパターンの陶片である⁴⁾。これらの陶片類は一様に1879(明治12)年の琉球処分による首里城明け渡しと熊本鎮台設置以後の遺物と断定できるのであろうか。

(2) 遺物出土の状況

首里城の成立は琉球沖縄史におけるいわゆる三山時代(1322年頃～1429年)に遡る。その正確な成立年代は不明であるが、1429年に第一尚氏第二代国王である尚巴志によって三山が統一されると、浦添から首里に中山の拠点が遷され、琉球王国全体を支配するグスクとしての首里城の地位が確立した。1469年の第七代尚徳の死までを第一尚氏、尚円即位以降の王統を第二尚氏とする。首里城「京の内」から出土した膨大かつ優良な明、さらには元代に遡る染付磁器群は王国の「大交易時代」と琉球の栄華を物証する遺物として近年とみに注目されてきた。対するに上述の「近代の磁器」群は、これまで注目されることの乏しい遺物類であったといえよう。90年代の下地安弘、宮城弘樹らの調査によって、沖縄県の考古学界においても近代の出土遺物に対する注意が喚起され始めた⁵⁾。上記の印判染付の碗を近代沖縄においては「スンカンマカイ」と称し、愛媛県の砥部で量産された雑器が大正中期頃に那覇の商店を介して沖縄県下にもたら

され、壺屋に代表される沖縄在来の窯場の陶器を抑えて流通していたことが解明されつつある⁶⁾。沖縄戦時の避難に際し、生活雑器を一括して埋納したものが発掘調査によって検出され、沖縄戦時の状況や戦前の生活実態を例証する遺物として注目されてきた⁷⁾。歓會門、久慶門内側地域から出土した陶磁器群は、戦時避難による一括埋納とも異なる状況で出土した遺物であり、これらを熊本鎮台沖縄分遣隊に関連する遺物とした根拠も分明ではない。熊本鎮台沖縄分遣隊とは1875（明治8）年5月に琉球に琉球処分を念頭に那覇に派遣され、真和志間切古波蔵村に駐屯地を置いた部隊を指す⁸⁾。4年後の廃藩置県に際して、二個中隊400名ほどが増員され、処分官松田道之による首里城接収とともに一個中隊が首里城に入った⁹⁾。この後、1896（明治29）年に沖縄派遣が終了するまで首里城は駐屯地として使用される。首里城正殿は兵員の宿舎として使用され、正殿前の龍柱が切断されるなど、首里城は荒廃したとされる¹⁰⁾。これらの兵員の日常食器として内地から持ち込まれた染付磁器が、盛土層に混じって検出されたものと考えられたのである。しかし熊本鎮台沖縄分遣隊の派遣は明治期の17年間で止まっている上に、その後首里城には学校施設や神社、博物館などが置かれ、沖縄戦まで施設利用が続いて行くことを考えると、近代に属する遺物を全て琉球処分時の兵員物資と見るのは無理があるのではないだろうか。そもそもこの区域の盛土がどこから搬入された土砂であったのかが判然としない。地形から推論するならば、首里城内郭の土砂を重機で攪拌して外郭地域に落とし込んだと考えるのが自然だが、確かにそのような手順で工事が行われたという証左はなく、遺物を包含していた盛土整地層自体が他の土地から搬入された土砂である可能性も否定はできない。ただし、同じ盛土層から古琉球に遡る陶磁器群も検出されているため、その種の陶磁器類が元から存在した場所として、やはり城内の土砂が攪拌され層位を失った遺物群が混乱した状態で埋め立ての盛土に使用されたのであろう、と推察されるのである。このように、検出の状況や遺物の属性が曖昧な出土陶磁器の中に、一点だけ西欧において生産されたと目されるウィローパターンの陶片が紛れていたのである。なぜ、ここからウィローパターンが検出したのか。またこのウィローパターンはどこで生産されたどのような製品であるのか。いかなる搬入経路を取って首里城に至ったのか。またそれはいつ頃の時代と推測されるのか。果たして近代以降の熊本鎮台沖縄分遣隊に帰属する遺物であるのか、考えられるさまざまな問題について、考証と検討を加えてみようと思う。

2. 首里城跡出土のウィローパターン陶片

(1) ウィローパターン陶片の所見

首里城内から出土した当該陶片は、差し渡し6cmほどの五角形断片を最大のものとして大小合わせて8個の破片から構成されており、鳥の絵柄などを含む上端部6個と、柳の絵柄と裏面のマーク部分を含む左下部分2個に分けて接合復元されている（図1）。2個のパーツを繋げると深皿状の円形器物の中心点から三分の一弱が看取できる。皿の見込み部分にはウィローパターンの典型である柳の木と楼閣の一部、枝の丸い巨樹と二羽の鳥、さらに遠景の鳥と建物の屋根、帆柱を持つ船が描かれている。リム（皿の周縁）部分にはスポード・ボーダーと称される雷文を崩したような特異な連続文様が施されており、これもウィローパターンの典型的な意匠であ

る¹¹⁾。さらに幸いなことに、断片の裏側、高台内であった部分にヴィニエットと称される製造業者の染付のプリンティド・マークと、陰刻によるインプレスト・マークが残存しており、より詳しくこの器物の属性を検証することが可能である(図2)。ヴィニエットはブドウの葉や蔓を楕円形に囲んだデザインで、中には *WILLOW* と斜体字大文字で、上部に *IRON STONE CHINA* の大文字と三本一組のひげ状の飾りがあしらわれている。下部には *P-R* の斜体字大文字の銘が同じく染付で入っており、これらが一組でプリンティド・マークを構成している。これに隣接してインプレスト・マークが施されており、楕円形の二重枠内上部に *P. REGOUT* 下部に *MAASTRICHT*、



(図1)

中央に3の文字が視認できた。これらの情報から、同陶片は19世紀オランダのマーストリヒトにおいて操業していたペトルス・レゲー窯のウィローパターンを用いた製品であることが確定できる¹²⁾。では、同社のウィローパターンがなぜ首里城の出土遺物の中から検出されたのかという点になると、確実なことがほとんど分明ではない。現在復元に向けた事業が進行している中城御殿跡の発掘調査において、西欧食器と考えられる遺物が検出されたことで、沖縄県内における近代の輸入陶磁器に関する注意が改めて喚起されている¹³⁾。中城御殿は王国期には王世子の御殿で、首里城明け渡し後には沖縄



(図2)

における尚家の邸宅となり沖縄戦まで王府さながらの暮らしが存続したことで知られる。戦前の古写真や資料などから、中城御殿の広間は沖縄戦直前には洋間の室礼が持ち込まれており、テーブルと椅子が据えられていたことがわかっている。このようなことから出土した西欧陶磁器片は近代以降の御殿において使用されていた洋食器の可能性が指摘されており、戦災によって失われた尚家の暮らしや文物の多様さを物語る遺物として注目されている¹⁴⁾。首里城内から出土したペトルス・レゲー窯のウィローパターンが、この尚家の洋食器群と何らかの形で関連づけられるか否かは不明である。そこで本論では、長崎、京都など日本各地で出土、伝世してきたペトルス・レゲー窯の製品およびウィローパターンの事例と、首里城陶片とを比較することで、沖縄における当該遺物の位相をより立体的に検討する可能性を求めた。

(2) 長崎・京都などにおける出土事例と伝世品

ウィローパターンを含む銅版転写染付は、長崎の出島や同市内各所の都市遺跡から多くの検出例が見られる。銅版転写染付は18世紀半ばのイギリスで発明され、1780年代にイギリスの陶器生産の中心地であったスタッフォードシャーにおいて量産化の軌道に乗ったものと考えられている¹⁵⁾。この銅版転写染付によるプリントウェアは、オランダ船の脇荷として、あるいは長崎、出島のオランダ商館内で使用される食器等の生活道具として日本にもたらされた¹⁶⁾。船載の契機として1798(寛政10)年3月6日に発生した出島オランダ商館の大火が指摘されている¹⁷⁾。またこの同時期、欧州はフランス革命とナポレオンの台頭によって混乱しており、カピタン部

屋の再建が成った1809（文化6）年以降に本格的にイギリス製のプリントウェアが日本に到来したとする見解もある¹⁸⁾。カピタン部屋跡他西側建造物群の発掘によれば同地点からのイギリス製プリントウェアは52点を数え、1815年から19世紀中期までの制作年にかかる製品が占めている¹⁹⁾。これらのプリントウェアや舶来の陶磁器は、日本各地の都市遺跡からも出土事例が報告されており、平安京左京一条四坊・二条四坊A地区の公家屋敷跡から出土したイギリス製のウィローパターン皿のように、公家、大名家、富裕な商家などの邸宅跡から検出されたものも見られる²⁰⁾。

また出島オランダ商館上記発掘区域から出土したオランダ製のプリントウェアは11点が挙げられその全てがペトルス・レゲー窯の製品である²¹⁾。それらは1855年から1880年までの制作年限に絞られる²²⁾。ペトルス・レゲー窯の製品は1850年代後半から大量に出島に陸揚げされたと見られ、伝世品の数も膨大に上る²³⁾。伝世されたペトルス・レゲー窯の製品には日本で詠えられたと思われる箱に納められたものが多く、その箱書きから日本に舶載され、収蔵家の手に入った年限を知ることができる。一例として『阿蘭陀焼－憧れのプリントウェア－海を渡ったヨーロッパ陶磁－』図録に記載されている《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ（柳）”》（個人蔵）の箱蓋表には「元治二年 高麗焼平鉢」の墨書があり、1865（元治2）年を一つの参考年代と捉えることも可能であろう²⁴⁾。このウィローパターンの高台内に付せられたプリンティド・マークは、首里城跡の陶片とほぼ同一のブドウと蔓のヴィニエットによるものであり、極めて近似した作品と言えるだろう²⁵⁾。また、このような伝世品群の中で、特に首里城跡の出土品と近い作例として注目されるのは神戸市立博物館が所蔵する10枚組のペトルス・レゲー窯のウィローパターン深皿であり、さらに詳細な比較検討を加えてみようと思う。

3. 神戸市立博物館所蔵作品との比較検討

(1) 神戸市博物館所蔵作品の概要

神戸市立博物館には江戸時代後期に舶載されたと考えられるプリントウェアが集中的に収蔵されている。ペトルス・レゲー窯のウィローパターン製品も三種類の皿、17枚が含まれている。同館の目録では《染付転写楼閣山水図深皿》とされる10枚一組、径26.0cm、1850-70年のもの（図3）、《染付転写楼閣山水図皿》5枚一組、径21.2cmとされるもの、さらに目録には掲載されていない波形状の縁を持つウィローパターンの深皿2枚がその内わけである²⁶⁾。いずれの器物も高台内にブドウと蔓のヴィニエット、WILLOW, IRON STONE CHINAなどの染付によるマークを持ち、首里城の陶片とこれらの伝世品とが、ペトルス・



（図3）

レゲー窯による同じシリーズの器物であることが推察できる。とりわけ10枚組の《染付転写楼閣山水図深皿》と首里城陶片は目視した限りでは寸法や形式の点ではほぼ同大同型であり、同一性の高い作例と推察される。だが両者をさらに詳細に比較検討すると、ある微細な違いに気づかされるのである。

(2) 意匠とマークに見られる異同

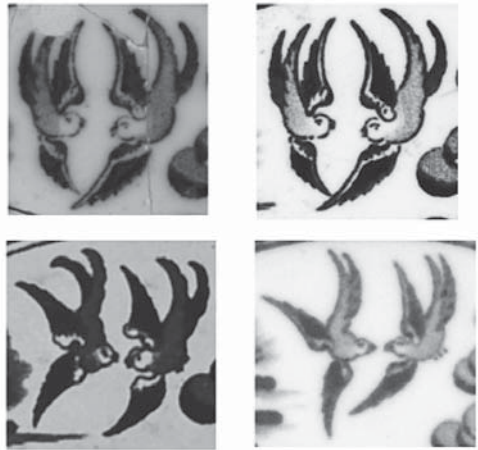
そもそもウィローパターンとは、清朝中期の中国、景德鎮製の青花磁器の絵柄が英国において模倣され、銅版転写染付の図柄となったものであり、複数のモチーフを組み合わせた図柄全体を指す。そのモチーフとは、円形の画面上右半分には、(a) 下部に陸地とジグザク状の柵と小径。(b) 上部には二階建ての中国風の楼閣状の建物と丸い綿帽子のような葉を茂らせた大木（むしろこのモチーフが最も特徴的ですからある。）と木立、奥には小高い築山と別の建物が登場する場合もある。(c) 左半分下部には湖水と中国風の橋、橋の上の三人の人物、島と瓦葺き平屋の建物、橋の袂に葉を垂らせた柳の木が現れ、(d) 左半分上部には湖水に浮かぶ帆柱を立てた船と船頭、別の島と木の間隠れに楼閣状の建物の屋根が現れる。(e) 全体の図柄の最上部には羽を広げて羽ばたくような二羽の鳥が、全体のプロポーションからしたらかなり大きな縮尺で描かれる。これらの見込み部分の絵柄全体は二重のボーダーによって取り囲まれており、(f) 亀甲繫ぎを想起させる内周のボーダーに対して、外周のボーダーには (g) スポード・ボーダーと称される卍崩しや七宝文、植物文を連ねた最も一般的な様式の他に、(h) モスキート・ボーダーと分類される（蚊と解釈されているが）蛾、ないし蝶のような虫の形状を描き入れた連続文様が表される。以上のさまざまなモチーフを一体としてウィローパターンと称するのである²⁷⁾。これらの要素は時代や生産地、メーカーを異にしても銅版転写という量産手法のしからしむ処か、ほぼ同様の組み合わせが踏襲されている。しかしながら、これらを仔細に観察すると同一に見える図柄にも異同が存在することを指摘できる。この微細な差異をどのように捉えるかが、首里城の陶片の属性を同定する上で少なからぬ意義を持つのである。このうち、(d) と (e) の要素、すなわち左上上部の船と鳥の部分、さらに二羽の鳥の描写に、特に顕著な相違点が見受けられる。船の帆柱が水面に落ちる鳥影にかかる部分に注目すると、首里城陶片では帆柱に掛けられたロープが一本であるのに対して（図4）、神戸市立博物館蔵深皿では2本（図5）、また帆柱と影の重なりが前者では顕著なのに対して、後者では重なり部分が少なく、白い水面が表されている。《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ（柳）”》は首里城陶片と一致する帆柱と鳥影の関係を示す（図6）。また久田五月氏所蔵のペトルス・レゲー窯皿に見られる船の描写は神戸市博のものと近いが全体的に線が不明瞭で船底のカーブも他の三点とは異なった形状である（図7）。そして両者の、



左上 (図4)、右上 (図5)
左下 (図6)、右下 (図7)

より明瞭な差異が看取できるのは鳥の描写である。首里城陶片では一對の鳥の羽根、尾羽が線対称形になるように中心軸に対して内転びに反って描かれている（図8）。ところが、神戸市立博物館蔵深皿10枚を一枚ずつ点検すると3枚だけが首里城陶片と同じ鳥の描写で（図9）、他の7枚は向かって左側の鳥の羽根が左側水平位置に降りており、尾羽の形状も線対称形ではなく、

右手側の鳥と相似形をなすように描写されているのである。つまり首里城陶片は鳥の描写では神戸市立博物館蔵深皿10枚のうち3枚と同版に見えるが、船と鳥影の描写に着目すると10枚の全てと異なる版ということになる。ちなみに《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ（柳）”》は神戸市博所蔵資料のうちの7枚分と共通する（図10）。しかし帆柱のロープは2本で神戸市博と同じであり、首里城陶片と神戸市博蔵品の中間的な特徴を示している。久田五月氏所蔵資料の鳥は首里城陶片の類形とは違うタイプに属するが、やはり船同様に他の資料のいずれともやや異なった特徴を示している（図11）。これらの微細な差異や共通性は、制作の時系列などに関してどのように考察されるべきであろうか。高台内のプリンティド・マークから得られる情報を比較し、さらに検証を進めてみたい。



左上（図8）、右上（図9）
左下（図10）、右下（図11）

神戸市立博物館所蔵の17枚と、上述した《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ（柳）”》、首里城陶片のプリンティド・マーク、またその他の類品から得られた資料を比較すると全て同型のマークが使用されているようにも見える。WILLOWの文字を観察するといずれの作例でも二つ目のLがわずかに傾き、Oが下寄りにずれているなど、微かな部分まで完全に一致する。これは同じ文字列の原版がどの転写版にも用いられたことを示しており、制作時期が接近している証拠と言えよう。それは神戸市立博物館の注記に依れば1850年から70年の間であり、《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ（柳）”》の箱書きを取るならば1865年かそれ以前ということになる。

だがブドウと蔓のヴィニエットの細部を詳細に観察すると、ヴィニエットには二つの種類があることがわかる。《染付転写楼閣山水図深皿》10枚中で、鳥の描写が首里城陶片と同じ3枚と、異なる7枚とは、葉の葉脈の数、蔓の巻きひげの描写など異なっている。つまり、上記3枚の深皿と首里城陶片とは同一のヴィニエットなのである。また《染付転写楼閣山水図皿》5枚もまた、首里城陶片と同じディテールのヴィニエットを有する。これに対して、残る7枚、目録記載のない2枚組の深皿、また《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ（柳）”》、さらにはデータを収集できたその他の個人蔵資料などは、それぞれ異なった器型であるにもかかわらず、葉の葉脈の数、蔓の巻きひげの描写などがより簡略化されたヴィニエットを等しく有している。WILLOWの文字列が同一でありながら、ヴィニエットの意匠は器型や寸法に関わりなく二つのタイプに別れる。この事実をどのように解釈すれば良いのであろうか。またそれは首里城陶片

の位置付けにどのような関係を有するであろうか。

この課題にさらなる情報を与えるのは、ヴィニエットの下部に転写されているP-Rの字体と脇のドットの表記である。首里城陶片ではローマン体斜体字でP-Rと表記されているのに対して、神戸市立博所蔵10枚組深皿では鳥の形状が一致する3枚のみ同一書体でP-Rとなっており、他の7枚ではPR（あるいはP.R）となっている。ローマン体斜体字は精緻なタイプのヴィニエットに対応し、飾り文字のものは簡略なタイプのヴィニエットに対応している。だが最も重要な情報は文字列の脇に付けられている小さなドットにあ

る。《染付転写楼閣山水図皿》5枚ではP-Rの列の下部に一つのドットが見られる（図12）。《染付転写楼閣山水図深皿》10枚組のうち3枚ではP-Rの、Rの横に縦一列に二つのドットが「:」のように打たれている（図13）。《染付転写楼閣山水図深皿》10枚組のうち7枚と《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ（柳）”》ではRの脇に斜め転写された三つの点「…」が確認できる（図14）。さらに目録記載のない2枚組の深皿では四つの点が斜めに打たれており、このドットが数字を表しているらしいことが推測できる（図15）。首里城陶片ではちょうどそのドットの部分が割れ目に掛かっているが、《染付転写楼閣山水図深皿》10枚組のうち3枚と重ね合わせて見ると、「:」の下側のドットが欠失し上の点一つが残っている状態と考えられる。その他、久田氏所蔵のペトルス・レゲー社製ウィローパターン皿では、PRの下部に小さく「v」の文字が入っているパターンのものがあり（図16）、これらのドットがローマ数字で1から5を表しているらしいことがより明確に推理できる。このドットは製造年を表すとする先行研究もあり、年代を知るために最も重要な情報といえよう²⁸⁾。ただし、Rの脇にあるものと下にあるものとは年代の桁が違う可能性もあるため、その確定にはペトルス・レゲー社の資料と現物データの蓄積による慎重な判断が必要である。上のヴィニエットの情報と併せて改めて整理すると下記ようになる。

- (a) 精緻なタイプのヴィニエット
 「・」《染付転写楼閣山水図皿》5枚
 「:」《染付転写楼閣山水図深皿》10枚組のうち3枚
 首里城陶片
- (b) 簡略なタイプのヴィニエット



(図12)



(図13)



(図14)



(図15)



(図16)

- 「…」《染付転写楼閣山水図深皿》10枚組のうち7枚
《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ（柳）”》
「……」目録記載のない2枚組の深皿
「v」久田氏所蔵資料

上述した船の描写や鳥の描写の比較検討と併せて考えるならば、少なくとも久田氏所蔵資料に見られる形の変化はこれらの中で最も後の時代に属するものと類推できそうだ。10年か20年の短い時間幅の中で複数のタイプが存在し、神戸市博所蔵資料のように同じセットの中に別のタイプのものが存在することも注目すべき点である。

(3) 首里城陶片の年代幅

ここまでの資料をもとに首里城陶片の年代観や位相について考えてみると、この遺物の製造年代を1850-70年のうちで、仮にドットの数字に依拠するならば52年とするか、62年と見るか、72年とするかが興味深い問題である。52年、62年と見た場合、この陶片が琉球処分以前、つまり琉球王国期に舶載されていた可能性も年代的な余地に照らしてより大きくなると言えよう。無論、いずれの年代であっても長崎伝来から時間幅を持って熊本鎮台沖繩分遣隊などの手によって首里城に持ち込まれた可能性もあるため、推測の域は出ない。だが可能性のある年代幅が広がるほど、この陶片を琉球処分後の軍資材に帰属させる根拠も希薄になるのである。

本論は、首里城陶片を他の伝世品などと比較検討した場合、その製造年代や沖繩への舶載時期には1850年から70年代末にかけての、少なくとも30年ほどの時間幅があることを指摘しておきたい。1850年当時と琉球処分の断行された1879年以降とでは、首里城をめぐる時代背景は激変を遂げている。当初は完品としてであったのか、琉球王国末期とはいえ王城として機能していた首里城に、このオランダ製ウィローパターンが搬入された場合と、王家の退去後に熊本鎮台沖繩分遣隊や、あるいはそれ以降の何らかの経緯によって城内に持ち込まれたのとは、ものをめぐる歴史的な意味が大きく異なる。断定するに足る確固とした資料や裏付けが得られない間は、いずれの可能性についても検討の余地を残しておくべきではないだろうか。また現在までの先行研究ではペトルス・レゲー窯の製品は全てオランダから長崎に持ち込まれ、長崎から各地の都市や個人の手へ渡って行ったものと考えられている。前稿においても示唆した点ではあるが、本論は船と鳥の図柄の異同やヴィニエットの情報を整理した結果、このウィローパターン陶片が1から5までの記号を持つ類品中の第二に位置することを示した。これを1850年から70年の間に置いた場合、52年、62年、72年の製作とそれ以降の舶載が推定される。よって、同陶片が琉球王国期に首里城に入った可能性も安易に否定し難いものと仮定されるのである。1879年以降の遺物と一括するのではなく、本論の考証を踏まえたより慎重な検討が今後の調査研究全般において必要である。

むすび

大阪市北区の鳥取藩蔵屋敷跡の廃棄坑から出土したペトルス・レゲー窯の《藍絵西洋人物図ボトル〔転写〕》などの資料から、西欧において酢や油を入れていたボトルが日本では酒徳利と

して使用されていたことや、オランダ側でも日本の嗜好や需要に応える製品を把握した上で輸出を行っていたことが指摘されている²⁹⁾。また、これらのオランダ製プリントウェアは、日常雑器として使用されていたのではなく、舶来の品として珍重の対象となっていた³⁰⁾。オランダやイギリスの製品を元に、手描きで図柄を模した「阿蘭陀写」や「京阿蘭陀」と呼ばれるオランダ写しの陶器が盛んに制作されたことは、これらのプリントウェアが趣味的な愛好の対象となり、好奇心をもって受容されたことを示している³¹⁾。ウィローパターンを含むイギリス製ないしペトルス・レゲー窯のプリントウェアは、幕末期の日本における日蘭の交易史や異国趣味の高まりに関係する、大きな資料群として捉えられるのである。

首里城陶片の最も重要な点は、琉球王国末期の沖縄が同時代の日本本土での工芸的な流行や異国趣味に対して全く関係ないままであったのか、わずかであっても関係性を持つ機会があったのか、という問題に関係してくることである。沖縄の工芸史には昭和初期の民藝運動がその代表であるように、手仕事の純粋性や日本の古層を見出そうとする視座や、沖縄自体が南国的なエキゾティズムの対象となるバイアスが幾重にも掛けられてきた。琉球王国の末期から近代初頭における沖縄のものづくりや工芸的状况に関する問題は、それらのバイアスを一旦対象化するところから始まるとも言えよう。本論は首里城から出土したオランダ、マーストリヒトのペトルス・レゲー窯のウィローパターンの陶片を取り上げ、その製造年代や舶載時期をめぐって日本国内における伝世品との比較検討を行ってきた。首里城陶片のオランダにおける製造年代は、伝世品群と離れた時期ではなく、1850年から70年前後の同時期作品と見て良いであろう。ただし、それが首里城に持ち込また経緯は、謎であるということがより明瞭となってきた。発掘報告書が述べるような熊本鎮台沖縄分遣隊説も積極的に否定、肯定するに足る物的証拠に乏しい。舶載時期を早く取れば、王国末期に長崎から何らかの経緯や理由で王府に搬入された文物とも考えられ、あるいはそのいずれとも関係なく全く後に城内に持ち込まれたとも仮定される。今後の新出資料の発見によっては、より精度の高い考察が可能となる。現時点ではこの陶片の存在について予断を持たずに注視し、調査を進めることが重要と考えるのである。

註

- 1) 沖縄県立埋蔵文化センター編『首里城京の内跡出土品展』(展覧会図録)、2012年、p.20。同図録収載の「重要文化財指定の名称と指定理由」より。
- 2) 本論は浦添市文化部紀要『よのつち』における当該陶片に関する拙論、磯部直希・久田五月「首里城跡出土のウィロー・パターン磁器片に関する工芸史的検討-19世紀銅板転写染付にみる伝播と越境-」浦添市文化部編『よのつち』第12号、2016年。を再検証し、新たな成果を加えて執筆したものである。
- 3) 沖縄県教育委員会編『首里城跡・歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』、1988年、p.63。
- 4) 同書、pp.63-69。
- 5) 下地安広「沖縄の遺跡から出土する近代磁器-浦添の遺跡を中心に-」沖縄考古学会編『南島考古』第14号、1994年。宮城弘樹「いわゆるスンカンマカイについて」壺屋焼物博物館編『壺屋焼物博物館紀要』第3号、2002年。
- 6) 宮城弘樹、同論文、p.2。
- 7) 同論文、p.4。
- 8) 原剛「明治初期の沖縄の兵備-琉球処分に伴う陸軍分遣隊の派遣」日本政治経済史学研究所編『政治

経済史学』第317号、1992年、pp.1-11。渡邊重綱『琉球漫録』、沖縄県立図書館、1995年。

- 9) 原剛, 前掲論文, p.5。
- 10) 熊本鎮台沖縄分遣隊が起こしたとされる事件として著名なのが、首里城正殿前の大龍柱の切断である。首里城正殿前の阿吽一對の龍柱を戦利品とするために切断したとされるもので、龍柱は短く縮められて接合され、向きも変わってしまったという。比嘉朝健「琉球の石彫刻龍柱」『アトリエ』第4巻第3号、1927年。また、首里城正殿は1846年の解体修理を最後に、80年以上修理の手が入らず、この間、正殿に付随する奉神門や広福門などが破損、撤去された。1924（大正13）年「琉球芸術調査」を行った伊東忠太と鎌倉芳太郎の尽力によって、首里城正殿は国宝指定を受けた。だが城郭の保存状態は極めて悪く、1933（昭和8）年に大規模な解体修理が竣工するまで、正殿は吹きさらしの倒壊寸前であった。しかしながら一連の首里城隠滅が全て熊本鎮台沖縄分遣隊の責に帰するものでないのは明確である。同隊による首里城接収は武力を背景とした明治政府による新たな支配を象徴する事件であり、主人を失った城郭が崩壊する過程の最初的一步として記憶されてきたと言えよう。
- 11) 岡泰正「ウィローパターンの起源と変容について－18世紀輸出陶磁史の一視点－」神戸市立博物館編『神戸市博物館研究紀要』第1号、1984年。
- 12) ベトルス・レグーの表記については「レグウト」「レグー」など数種類の表記があるが、本論では愛知県陶磁資料館編『阿蘭陀焼－憧れのプリントウェア－海を渡ったヨーロッパ陶磁－』、2011年に依拠して「ベトルス・レグー」とした。
- 13) 沖縄県立埋蔵文化財センター編『中城御殿跡 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（5）』第84集、沖縄県立埋蔵文化財センター、2016年。
- 14) 同書, p.65。
- 15) 岡泰正「オランダ・マーストリヒトにおけるレグウト窯の陶器について－江戸時代後期のオランダ陶器受容に関する基礎資料」, 箭内健次監修『長崎出島の食文化』, 親和銀行ふるさと振興基金, 1993年, p.127。
- 16) 岡泰正「出島出土のヨーロッパ陶器をめぐって」, 長崎市教育委員会編『国指定史跡 出島和蘭商館跡 カピタン部屋跡他西側建造物群発掘調査報告書』第2分冊（考察編）, 長崎市教育委員会, 2008年, pp.1-41。
- 17) 同書, p.17。
- 18) 同書, p.17。
- 19) 同書, p.52。
- 20) 京都市埋蔵文化財研究所編『平安京右京三条一坊二町跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-6）』京都市埋蔵文化財研究所, 2004年, pp.18-19に京都市内から出土したウィローパターンについて記述がある。京都御所東方公家屋敷群跡の出土例を含める例が紹介されている。
- 21) 岡泰正「出島出土のヨーロッパ陶器をめぐって」, 前掲論文, p.25。
- 22) 同論文, p.25。
- 23) 同論文, p.19。
- 24) 愛知県陶磁資料館編『阿蘭陀焼－憧れのプリントウェア－海を渡ったヨーロッパ陶磁－』（企画展図録）, 愛知県陶磁資料館, 2011年, p.51, p.113。
- 25) 同書, p.113。
- 26) 磯部直希, 前掲論文, p.11。
- 27) 岡泰正「ウィローパターンの起源と変容について－18世紀輸出陶磁史の一視点－」, 前掲論文, p.1, p.18。
- 28) 岡泰正「オランダ・マーストリヒトにおけるレグウト窯の陶器について－江戸時代後期のオランダ陶器受容に関する基礎資料」, 箭内健次監修『長崎出島の食文化』, 親和銀行ふるさと振興基金, 1993年, p.140。
- 29) 岡泰正「プリントウェアの復権をめざして－日本におけるヨーロッパ転写陶器受容の意義－」, 愛知

県陶磁資料館編『阿蘭陀焼－憧れのプリントウェア－海を渡ったヨーロッパ陶磁－』（企画展図録），愛知県陶磁資料館，2011年，p.99。

30) 岡泰正，同論文，p.98。

31) 長久智子「藍絵阿蘭陀写」愛知県陶磁資料館編『阿蘭陀焼－憧れのプリントウェア－海を渡ったヨーロッパ陶磁－』（企画展図録），愛知県陶磁資料館，2011年，pp.101-103。同論文に依れば，藍絵阿蘭陀写にはプリントウェアの点描技法，17-18世紀のデルフトウェアからのブルー&ホワイト，更紗などのアジア製染織品からの花卉唐草文など時代や素材，技法をまたぐ多面的な要素が結実しているとのことである。異国的な雰囲気をもった陶磁器を象徴する語として「阿蘭陀」の語が用いられた。

参考文献（著者，アルファベット順）

- 愛知県陶磁資料館編『阿蘭陀焼－憧れのプリントウェア－海を渡ったヨーロッパ陶磁－』（企画展図録），2011年。
- H. A. Crosby Forbes, *Hills and Streams: Landscape Decoration on Chinese Export Blue and White Porcelain*, Milton, 1982.
- 磯部直希・久田五月「首里城跡出土のウィロー・パターン磁器片に関する工芸史的検討－19世紀銅板転写染付にみる伝播と越境－」浦添市文化部編『よのつち』第12号，2016年。
- 江淑玲「全球化文化下の當代青花藝術實踐」新北市立鶯歌陶瓷博物館編『陶博館』52号，2016年。
- 京都文化博物館編『異国の風－江戸時代京都が見たヨーロッパ』（企画展図録），2000年。
- A. M. *The Story of the Willow Pattern Plate*, London, 1975.
- 長久智子「ベトルス・レゲー社の日本向け輸出製品－19世紀オランダ・マーストリヒト陶器の一側面－」愛知県陶磁資料館編『愛知県陶磁資料館研究紀要』16，2011年。
- 岡泰正「オランダ・マーストリヒトにおけるレグウット窯の陶器について－江戸時代後期のオランダ陶器受容に関する基礎資料－」箭内健次監修『長崎出島の食文化』親和銀行ふるさと振興基金，1993年，p.127。
- 岡泰正「出島・食卓の情景－平成9・10年度の発掘におけるヨーロッパ陶器・ガラス器をめぐる－」長崎市教育委員会編『国指定史跡出島和蘭陀商館跡道路及びカピタン別荘跡発掘調査報告書』，2002年。
- 岡泰正「ウィローパターン・ストーリー」神戸市立博物館編『神戸市立博物館研究紀要』第25号，2009年。
- 沖縄県教育委員会編『首里城跡・歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる構構調査』，1988年。
- 沖縄県立埋蔵文化センター編『中城御殿跡 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)』，2011年。
- 下地安広「沖縄の遺跡から出土する近代磁器－浦添の遺跡を中心に－」沖縄考古学会編『南島考古』第14号，1994年。
- 新北市立鶯歌陶瓷博物館編『意想青花瓷－新世紀的震撼』（企画展図録），2015年。
- 東田雅博「柳模様の世界」『図像のなかの中国と日本 ヴィクトリア朝のオリエンタ幻想』山川出版社，1998年。
- 東田雅博『柳文様の世界史－大英帝国と中国の幻影』大修館書店，2008年。
- 山田智三郎『十七、十八世紀の歐洲美術における東亞の影響』アトリエ社，1942年。

図版解説及び出典

- (図1) 首里城跡出土のウィローパターン断片（表面全体）沖縄県立埋蔵文化財センター蔵
- (図2) 同資料裏面拡大
- (図3) 《染付転写楼閣山水図深皿》（10枚のうち首里城跡陶片と同様の鳥の描写を持つ一枚，表面全体），ベトルス・レゲー窯，マーストリヒト，オランダ，19世紀，神戸市立博物館蔵
- (図4) 首里城跡出土のウィローパターン断片（船部分）沖縄県立埋蔵文化財センター蔵

首里城跡出土ウィローパターン陶片に関する考察（磯部）

- (図5) 《染付転写楼閣山水図深皿》(10枚のうち首里城跡陶片と同様の鳥の描写を持つ一枚, 船部分), ベトルス・レゲー窯, マーストリヒト, オランダ, 19世紀, 神戸市立博物館蔵
- (図6) 《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ(柳)”》(船部分), 愛知県陶磁資料館編『阿蘭陀焼-憧れのプリントウェア-海を渡ったヨーロッパ陶磁-』(企画展図録), 2011年, p.51。
- (図7) 久田五月氏所蔵資料より船部分。
- (図8) 首里城跡出土のウィローパターン断片(鳥部分) 沖縄県立埋蔵文化財センター蔵
- (図9) 《染付転写楼閣山水図深皿》(10枚のうち首里城跡陶片と同様の鳥の描写を持つ一枚, 鳥部分), ベトルス・レゲー窯, マーストリヒト, オランダ, 19世紀, 神戸市立博物館蔵
- (図10) 《藍絵楼閣山水図皿〔転写〕“ウィロウ(柳)”》(鳥部分), 愛知県陶磁資料館編『阿蘭陀焼-憧れのプリントウェア-海を渡ったヨーロッパ陶磁-』(企画展図録), 2011年, p.51。
- (図11) 久田五月氏所蔵資料より鳥部分
- (図12) 《染付転写楼閣山水図皿》(5枚組のうち1枚, 裏面部分) ベトルス・レゲー窯, マーストリヒト, オランダ, 19世紀, 神戸市立博物館蔵
- (図13) 《染付転写楼閣山水図深皿》(10枚のうち首里城跡陶片と同様の鳥の描写を持つ一枚, 裏面部分), ベトルス・レゲー窯, マーストリヒト, オランダ, 19世紀, 神戸市立博物館蔵
- (図14) 《染付転写楼閣山水図深皿》(10枚のうち首里城跡陶片と異なる鳥の描写を持つ一枚, 裏面部分), ベトルス・レゲー窯, マーストリヒト, オランダ, 19世紀, 神戸市立博物館蔵
- (図15) 目録記載のない二枚組のウィローパターン深皿(2枚のうち1枚, 裏面部分) ベトルス・レゲー窯, マーストリヒト, オランダ, 19世紀, 神戸市立博物館蔵
- (図16) 久田五月氏所蔵資料(裏面部分)

